

*** 1874年(明治7年)～1978年(昭和53年)の東京天文台の年表**

東京天文台百年記念誌資料について、アーカイブ新聞に記事を書いている。東京天文台百年記念誌編集委員会の手による資料を掲載してきたが、今回はアーカイブ室新聞第349号(2010年6月11日)の資料の2箱目の「16) 天文台 100年誌 年表原稿(一応用済み) 封筒に入った年表原稿多数」について記事にしておく。「東京大学東京天文台の100年1878-1978」P69～74に掲載された年表の原稿段階のもので、各編集委員が草稿したものである。「東京大学東京天文台の100年1878-1978」には掲載されなかった事項もあり、これらで今一度東京天文台の年表を作成してみた。「東京大学東京天文台の100年1878-1978」に掲載された事項は青字で表し、掲載されなかった事項は黒字で書いた。

西暦	元号年	月日	東京天文台沿革	元号年	月日	出張観測・参考関係事項など
				明7年	12月9日	金星日面通過観測のため開成学校畠山義成らが長崎に出張してアメリカ・フランス観測隊に随従実習をした
1878	明11年	2月8日	文部省 本郷本富士町に観象台建設のための伺書を提出し、同26日設置決定	明11年	5月	理学部に「数学・物理学及星学」科を新設。
		6月	メルツ赤道儀到着		10月	水星日面通過
		9月3日	東京大学理学部観象台落成			アメリカ人物理学教授メンデンホール来朝、観象台(で重力測定のための)に於て天測を学生に教授
		9月11日	文部省より15cm赤道儀、6cm子午儀交付さる			
				明13年	6月	海軍観象台メルツ・レブソルド子午環購入(21年東京天文台へ移管)
					8月	初めての星学教授ヘンリー・M・ポール来日
				明14年	9月	「数学・物理及星学科」を3科別々の科に分離
1882	明15年	2月13日	気象台を分離し、観象台は天象台となる	明15年	12月7日	寺尾寿フランス留学を終え理学部講師となる。帰朝の途中マルチニコ島にて金星日面通過(明15.12.7)の観測に成功。
				明16年	3月	寺尾寿フランス留学から帰り、理学部講師となる
				明16年	10月31日	金環食(宮城県) 雨
				明17年	6月	寺尾寿東大教授となり天文教育担当
						ワシントンで万国子午線会議開催、菊池大麓出席、本初子午線などを討議
				明18年		寺尾、水原順三郎を助手として星学教場で天体力学などを講義
1886	明19年	3月1日	帝国大学令公布、天象台は理科大学天象台となる	明19年	3月24日	寺尾は本初子午線並計時法案審査委員となる
				明20年	8月19日	栃木県白河 皆既日食(寺尾)、くもり
1888	明21年	6月1日	理科大学天象台は廃され、麻布飯倉の海軍観象台のあとに東京天文台の設置を決定。寺尾寿初代台長となる。この時職員は台長ととも6名。	明21年	1月1日	東経135度の子午線の時を本邦一般の標準時として実施(明治19年7月公布の勅令第51号)。明治19年7月13日勅令51号による
		6月2日	主な器械は、レブソルド子午儀、トロートン及スミスの赤道儀、メルツ赤道儀、メルツ及びレブソルド子午環、以上、6月18日に水路部、9月19日に内務省より書籍などと共に引き継ぐ。		7月	星学科第1回卒業生(平山信、芦野敬三郎)を出す トロートンは現在、上野国立科学博物館に保管転換し展示してある
		6月4日	文部省が東京天文台を帝国大学に属せしむと告示		12月	勅令第81号公布。「天象観測及曆書調製は自今文部大臣をして之を管理せしむ」
		9月	内務省より正午報時を引き継ぐ			曆は従来は内務省地理局編集、神宮司庁から(明治16年より)頒布
		12月5日	勅令第81号「天象観測及曆書調製は自今文部大臣をしてこれを管理せしむ」			
1889	明22年	2月	寺尾台長は理科大学長菊池大麓とともに天文台拡張の上申書を提出。東京天文台年報(Annals de l'Observatoire Astronomique de Tokio)発刊(大正11年5巻5号まで)			
1890	明23年		子午儀室、太陽写真儀室建設	明23年		帝国大学総長・台長と神宮との間に編暦に関する条約書を交換、し原稿は天文台で作成し、曆の頒布は神宮にすることに関し8条を取り決めた
				明24年		編暦は帝国大学総長の直轄となる
1893	明26年		赤道儀室完成	明26年		星学科は2講座となり第1講座派を寺尾、第2講座を平山が担当
		8月10日	帝国大学官制(勅令第83号)が公布され、その第12条には「理科大学附属東京天文台に東京天文台長を置き理科大学教授より文部大臣之を補す。天文台長は帝国大学総長の下に於いて東京天文台の事を掌理す」とある。大学は講座制となり(勅令82号)星学科は2講座となり(勅令93号)、第1講座を寺尾寿、第2講座は28年より平山信が担当した			
		9月11日(施行)				
1894	明27年		経緯儀室完成			
1895	明28年		プランジャー天体写真儀(筒とレンズ)購入	明28年		中央標準時
				明29年	1月1日	本邦一般の標準時を中央標準時と称す(勅令167号)
1896	明29年		第2子午儀室完成		8月9日	北海道皆既日食、くもり(枝幸に寺尾ら、厚岸に平山、菊池ら)
1897	明30年		天体写真儀室できる	明30年	6月18日	東京帝国大学官制(勅令210号)公布。帝国大学は東京帝国大学と改称(勅令208号により)。
1898	明31年		勅令第90号 閏年に関する件	明31年	1月22日	初めての海外(印度)への日食遠征、快晴にてコロナ撮影に

						成功(寺尾、平山、水原ら)。
					5月11日	勅令第90号、閏年に関する件公布
1899	明32年		平山信、戸田光潤らにより、銀河域の写真観測開始	明32年		水沢に緯度観測所開設
1900	明33年	3月6日	ブラッシャー天体写真機により新小惑星(東京・日本)初めて撮影、後に東京、日本と命名される 第1回談話会	明33年		日本で初めて34哩の無線通信に成功
1901	明34年		太陽観測用シネロスタート完成	明34年	5月18日	スマトラ日食遠征 晴れ 成功(平山信ら、平山清次、早乙女清房)
1903	明36年	3月2日	横浜、神戸港の標時球による報時開始(東京天文台制御)(後には門司・大阪も)(天文月報記事によると明治36年3月2日)	明35年	10月4日	従来太陽中心で計算された日出入時刻を36年度より太陽の最上点と変更した(明治35年文部大臣告示165号)
1904	明37年		20cmゴーチェ子午環購入し予備観測を実施			
1906	明39年		変光星の実視観測開始(一戸直蔵)	明39年		日露戦争後の樺太北緯50度線割譲の会議ならびに測量のため理科大学平山清次ら参加
1907	明40年		天体写真機室完成			
1908	明41年	6月20日	門司の報時球捜査開始	明41年	1月19日	日本天文学会創立のため発起人会(出席者18名)が開かれ、その席上会の成立が宣言され、4月号を以て天文月報が創刊 水路部が無線報時による経度差の測量始める
1909	明42年		テッファー分光太陽写真機、シュタインハイル太陽写真機購入	明42年		
		3月31日	三鷹村に民有地73,284坪の土地を購入、以後も引き続き購入、民間より7589坪の寄付を受け、その後4年間の内務省の移管を合わせ92,890坪となる		4月~5月	明治43年4月~5月 ハレー彗星現る
				明43年	4月~6月	ハレー彗星観測のため梅雨の内地を避け、満州日日新聞の援助を受け大連へ出張(早乙女、帆足)
1911	明44年	12月1日	天文台の分秒信号をもとに、銚子局より無線(分)報時開始 シュタインハイル10.5cm望遠鏡による太陽写真観測開始			
1912	大元年	9月1日	時刻通知を自動化			
1914	大3年		三鷹の建設工事開始			
1915	大4年		東京天文台年報付録発刊(昭和11年54号まで) この年より太陽分光写真機による毎日の観測開始	大4年	8月11日	小笠原母島 金環食 出張 うすくもり(早乙女ら)
1916	大5年	4月	三鷹本館起工			JJC船橋無線局が開始された(JJCの始まり)
		6月	三鷹官有地652坪内務省より移管される			
1917	大6年	4月	三鷹本館竣工			
1918	大7年	9月19日	日本の経度の原点として麻布大子午儀の中心139° 44' 40.9" が告示される	大7年	6月9日	鳥島皆既日食 くもり(帆足、河合章三ら)
1919	大8年	2月6日	勅令第12号により帝国大学令の改正が公布され、4月1日に施行された。従来の文科大学は学部となり、さらに勅令第50号に依り帝国大学官制が公布され(3月31日、本台も東京帝国大学理理学部附属東京天文台と改称され第9条により天文台長は理学部教授より文部大臣が之を補すとなった。	大7年	9月19日	帝国大学令(明治19年) 本邦基準経度として東京天文台大子午儀中心経度139度44分40.9秒E、9時18分58秒727を採用
		3月31日	東京帝国大学官制勅令第50号)公布、第9条により天文台は理学部附属東京天文台となる。台長は理学部に属する教授より選ぶ			
		4月1日	東京帝国大学理学部附属東京天文台と改称される			
		10月9日	寺尾台長退官、平山信2代目台長に就任			
1920	大9年	6月	太陽写真機室、分光機室、連合子午儀室竣工	大9年	6月10日	時辰覧会の際、生活改善同盟会にて「時の記念日」を定め、この日から始める
1921	大10年	11月22日	東京天文台官制(勅令第450号)が公布され、東京天文台は理学部附属を離れ東京帝国大学附属となった。 この第2条に「東京天文台ハ天文学ニ関スル事項ヲ研究シ天象観測、曆書編製、時ノ測定、報時及時計ノ検定ニ関スル事務ヲ掌ル」と定められた			昭和24年5月31日 国立学校設置法附則により廃止
1922	大11年	4月26日	官制改正して定員増加(勅令第231号) 年報5巻5冊をもって休刊	大11年		ローマの国際測地学・地球物理学連合(IUGG)総会に平山台長が出席し無線報時を仲介とした各国標準時比較の実施の決議に加わる
		6月23日	官制快晴して定員増加(勅令第306号)			
		6月	橋元ら三鷹で経度、緯度の観測開始			
1923	大12年	9月1日	関東大震災で麻布の多くの器械類(5吋子午環、3吋子午儀など)が損傷し三鷹への移転促進せる 三鷹の時刻観測本格化	大12年		三鷹 1号子午儀中心経度9時18分10.100秒採用
				大12年		文部省測地学委員会に国際報時所を設置することが決定
				~13年		12年10月より天文台構内で国際報時の受信開始。アンテナ、受信機、庁舎など13年3月に完成
1924	大13年	6月	三鷹から報時発信	大13年	3月末	報時所完成(事務的に)
		9月	三鷹に事務の一部移転(文部省告示第362号)(11日官報)			
			ブラッシャー天体写真機三鷹へ移転、これにより小惑星8個を発見(及川)			及川は昭和5年学士院賞
1925	大14年	2月	理科年表第1号(大正14年版)発行	大14年	3月22日	東京放送局開始
1926	大15年	9月15日	無線報時利用による万国経度測量を実施、現在の時刻および緯度報告(タイムアンドラチチュードプレチン)に当たる			
		~11月30日	報時出版物第1号発刊 65cm赤道儀、シーロスタート、450mmレンズ、20cm彗星搜索鏡など注文 Wireless Time Signals received at the Mitaka Station (現在のTime and Latitude Bulletin)第1号発行			
	昭元年		ゴーチェ子午環三鷹で初めて本格的に使用される			
1927	昭2年	5月	天文短編報告(プレチン)発刊(昭和20年738号まで) 彗星搜索鏡据付完了、20cm赤道儀を購入			昭和20年第738号で終わる
1928	昭3年	3月31日	平山信台長退官。早乙女清房3代台長に就任。 塔望遠鏡購入、塔の建築は5年に終了			塔望遠鏡購入(アインシュタイン塔建屋は昭和5年完了)
1929	昭4年	秋	65cm赤道儀の据付完了	昭4年	5月9日	マレー半島皆既日食、内部コロナ撮影(早乙女ら)清房、木下国助、白石通義、蓮沼左千夫)
				昭4年	10月	京都大学花山天文台設立

1930	昭5年	5月	及川奥郎 小惑星発見の功により学士院賞をうく	昭5年		及川奥郎小惑星発見の功により学士院賞受賞
1930	昭5年	2月10日	塔望遠鏡(昭和3年に購入)の塔の建築完了	昭5年		小惑星エロスの衝の国際共同観測じっし
1931	昭6年		直視分光器による太陽紅炎の観測開始(早乙女)	昭6年		
1932	昭7年	8月	東京天文台 学用報時試験放送開始	昭7年	8月31日	アメリカ・メイン州 皆既日食、晴れ、成功(及川・野附ら)、
		10月下旬	東京天文台報発刊			
1933	昭8年	8月	クック30cm写真儀購入			
	昭8年	9月1日	学用報時JJC正式発足			
1934	昭9年		水晶時計設置	昭9年	2月14日	南洋ローソップ島皆既日食 晴、成功(早乙女ら)
1935	昭10年		コーチェ子午環の惑星観測始まる			
1936	昭11年	3-4月	3月31日早乙女台長退官、4月15日、関口鯉吉第4代台長に就任	昭11年	6月19日	北海道北見地方皆既日食成功(早乙女、関口ら多数参加)
		7月17日	下保 新彗星発見			
1937	昭12年	4月	東京天文台年報第2輯発刊、天文学文献抄録(昭和16年第9冊まで)および太陽面現象週報を発刊(戦争中休刊)	昭12年		西武標準時廃止 日中事変勃発
1938	昭13年	8月	研究所関係職員(高等官、高等技官)候補者推薦内規制定 台長候補者は、1)理学部長と天文学教室の協議により推薦す、2)任期なし、となった			
			東京天文台欧文報告(リプリント)発刊			
1939	昭14年	6月27日	関口台長は文部省学術局長に転出、16年3月31日まで福見尚文が台長事務取扱となり、その後再び関口台長となる			
1941	昭16年	12月	田無の東大農場に時刻測定点を設ける	昭16年	9月21日	石垣島皆既日食 成功(関口ら)
					12月8日	太平洋戦争開戦(第2次世界大戦に参戦) 種々の戦争対策、疎開などが行われ、65cm赤道儀も解体、ドームは20年空襲により軽微ながら損傷を受ける
				昭18年	2月5日	北海道厚岸皆既日食 成功(関口ら多数)
1944	昭19年	2月	東京天文台分室を理学部天文学教室(恒星視位置計算のため)、神戸海洋気象台(非常の際、時刻測定と報時発信をするため)に置くとともに、水沢緯度観測所、気象台袖岡地磁気観測所に一部疎開			
1945	昭20年	2月8日	早暁 本館焼失	昭20年	8月15日	終戦
					12月15日	米軍司令部の覚書により神社に対する国家援助禁止となる 学術会議に「電離層特別委員会」ができる
1946	昭21年	1月	暦象年表(21年版)発行(地人書館より50万部、定価1円)*			*これは20年12月15日米軍司令部の覚書により神社に対する国家援助が禁止されたため従来の神官暦に代わるものとして編集された。
		10月	3棟 計57坪のバラック庁舎完成			技師は2級技官、技手は3級技官と呼ばれるようになる
		10月12日	関口台長退官、萩原雄祐第5代台長就任			東京帝国大学は東京大学と改称
1947	昭22年	3月	二級官会議を主任会議と改め定期化する	昭22年	10月	
			コロナグラフ試験観測			
		10月	天文台短編報告(プレチン)第2輯発刊			流星の2観測点同時観測始まる
1948	昭23年	4月10日	分秒報時試験放送開始	昭23年	5月1日	夏時間始まる(法律29号)
		5月	研究部を発展させ官制改革を進めることを主任会議で諮る。 研究部門を精密天文時、恒星位置、小惑星・彗星・衛星、天体大気構造、太陽面現象、月・惑星の運動の七つにわけて予算要求をまとめる			
		6月11日	掩蔽特別観測事業開始		5月9日	礼文島金環食、成功(萩原ら)
		7月10日	測地学委員会の三鷹国際報時所を合併、その職員は天文時部経度研究課の所属となる			この年より電波天文学研究始まる
		7月	戦後の子午環観測再開する			
		7月中旬	乗鞍山頂においてコロナグラフの試験観測			
		8月1日	報時室の新築がなり分秒報時(JJY)正式放送を1日より開始 スペクトロ・ヘリオスコープ完成			
1949	昭24年	1月	精密天文時、恒星位置の2部門が初めて認められ、教官制への移行が始まり、それに対応して2月、7部24課の新機構を整備。4月、天体電波研究課を加え25課とする。	昭24年	5月31日	国立学校設置法施行規則が制定され、教授・助教授などの定員を規定
		2月	技官制から教官制としての新機構に改め部門を7部25課として体制を整える			
		2月28日	木造本館150坪完成			
		4月	天体電波研究課が生まれ、200MHzの太陽電波観測設備を建設、9月より連続観測開始。 太陽面現象報告(プレチン)発刊(昭和46、Vol.22まで レプルド子午儀によるわが国初の本格的星表出版			
		5月31日	東京天文台官制(大正10年制定)に代わる国立学校設置法(勅令第150号)が公布され、東京天文台は東京大学附置研究所となる。			
		9月26日	乗鞍山頂に初めて観測室完成(20.8坪)、越年試験観測			
1950	昭25年	2月7日	スピカの掩蔽光電観測に成功			暦表示が問題となってくる。
			移動用30cm反射望遠鏡購入	昭25年	9月12日	帯広部分日食を、八木アンテナを用い初めて電波観測(三鷹と共同で)(畑中ら)
		3月31日	第2本館(木造75坪、後の分光実験室)落成			65cm望遠鏡に光電観測装置をつける
		7月26日	10cmコロナグラフ完成、乗鞍コロナ観測所開所式挙行			
1951	昭26年		小惑星彗星部門設置される	昭26年	6月	計量法「時間の単位・秒は平均太陽日の86400分の1として東京天文台が決定する時間で現示する」を制定
			コーチェ子午環の恒星観測開始		12月	太陽面現象の日々の観測結果を電波研より全世界に放送開始(ウルシグラム)
			10mパラボランテナ着工			
1952	昭27年	8月	この月より1950年チューリッヒのURSIの決議に従い、200MHz、399MHzの連続観測開始 天体電波部門設置(昭和42年6月太陽電波部)	昭27年		ローマの国際天文学連合総会で暦表示採択
		5月19日	水晶時計KQ-4設置される		4月1日	夏時間廃止(法律84号)
		8月	300MHzの連続観測開始			
		10月1日	水晶時計群(3Q-1)が整備され、リーフラーの使用停止、全面的に水晶時計になる			
1953	昭28年	3月	写真天頂筒(1952年度)および10mパラボランテナ完成			極望遠鏡1号機に着手
		7月	東京天文台部長会内規および台長ならびに教授推薦			報時設備一新完了

			内規制定			
		10月29日	創立75周年式典挙行	昭28年	4月	東京大学に新制大学院設置
		10月31日	有線正午報時廃止			
			ロンビツクアンテナ2基建設			
		12月	30cm写真天図写真儀を新観測室に設置			
		12月	74吋反射望遠鏡建設委員会発足			
			写真天図写真儀を新観測室に設置			
1954	昭29年	1月8日	三鷹で極望遠鏡の観測開始			
			乗鞍に紅炎早撮り装置観測室22.5坪完成(器械は昭和30年になって取付)			
			74吋望遠鏡建設委員会生れる(藤田良雄委員長)			
		9月21日	三鷹の環境保全のため前年末の話を件か「調布飛行場を運輸省が管理し使用する場合は申し合わせ」が成立			
			188cm反射望遠鏡建設地選定のための試験観測を長野、岡山、静岡の3か所で開始			
			2mx5mビームアンテナ4基200MHz太陽電波干渉計完成			
			2mx8mビームアンテナ太陽スペクトル用			
1955	昭30年		太陽面現象部門設置	昭30年	6月1日	台内とは別に、74吋反射望遠鏡建設委員会設置(委員長萩原台長、建築の武藤清、渡辺要、土木工学の最上武雄、電気工学の山村昌、機械工学の古沢武男および東大事務局長、会計、営繕課長らと藤田良雄が委員)
		7月1日	法律44号国立学校設置法の一部改正により、東京天文台目的変更:「天文学に関する事項の研究及び天象観測並びに歴史編纂、中央標準時の決定及び現示並びに時計の検定に関する事務」			
		9月28日	三鷹2,370坪購入		6月20日	セイロン島日食(古畑ら)、鹿児島で電波による日食観測成功(森山、赤羽)
1956	昭31年	6月1日	天体電波部が分光部より、測光部が天体掃索部より独立し、天文台課規定を定め8研究部27研究課制実施	昭31年		世界時UT2採用、暦表示の秒定義
		6月11日	188cm反射望遠鏡を岡山県竹林寺山に設置することを決定			
		秋	千葉県丸山に夜光観測所開設			
			ヨーロッパ向けロンビツク型受信空中線新設			
		11月10日	乗鞍・すずらん連絡所開所式、20トン燃料タンク設置			
			卯酉儀用ドームに30cm反射望遠鏡を入れる			
			IGYを控え、前年度来67MHz、100MHz干渉計を含む各種の電波観測装置を設置する			
			天体電波部が分光部より独立する			
			測光部が天体掃索部より独立する			
1957	昭32年	1月1日	JJC新形式に依り発信	昭32年		IGY(国際地球観測年)1957~1957
		3月31日	萩原台長退官		4月	測光部にIGYの大気光世界資料センター設置
		4月1日	宮地政司第6代台長に就任			
			測光部冷却式光電受光器完成		7月16日	乗鞍コロナ観測所に初めてジープ購入
			新観測地選定のため堂平山で試験観測開始			初めて南極観測隊に参加し大気光を観測(中村純二)、以後たびたび行う
		7月	単色太陽写真儀が設置され、11月より連続撮影開始			
		12月	30cm写真儀にマルコピッチカメラ(月位置カメラ)設置し、観測開始		11月	人工衛星第1号(スプートニク1号)打上げ成功(ソ連)この年より年次報告有
			塔望遠鏡大改修			
1958	昭33年		測光部門設置	昭33年	4月15日	「表時による秒は東京天文台が現示する(法律61号)計量法の一部改正
			ペーカーマン・シュミットカメラ到着、前年に建築済みの建物に設置(三鷹)		4月19日	八丈島・種子島金環食、晴れ、成功(斉藤ら)
		12月17日	岡山天体物理観測所起工式		10月12日	スワロフ島皆既日食、晴れ、成功(末元ら)後半曇り
1959	昭34年	9月25日	乗鞍コロナ観測所開設10周年式典	昭34年		IGY(国際地球観測年)終了
			年次報告(1957、58合併)発刊			IGC国際地球共同観測(1959)
1960	昭35年	3月31日	東京天文台における学用報時(JJC)廃止する	昭35年	1月	第4次南極観測隊に参加、宗谷で出発(中村強)
		4月	岡山91cm光電赤道儀組立て終り試験観測開始			協定世界時(UTC)正式に発足 時刻UTZ秒間隔AT 周波数オフセットと秒信号ステップ調整0.1秒
		10月19日	岡山天体物理観測所開所式		4月	理学部天文学教室 麻布より本郷に移転
		11月18日	岡山188cm反射望遠鏡の引き渡しを受け試験観測開始(61年3月月報)			
			報時受信用方向探知用アンテナ設置			
1961	昭36年	3月	岡山本館落成	昭36年	3月	生産技術研究所のロケットによる大気光観測開始
		3月	図書館増築			堂平72,846m ² 平方メートルの土地借用に月東大総長と埼玉県知事と覚書交換
			恒星分光部門設置		11月	岡山の観測環境保全のため岡山県その他と折衝開始
			Kコロナグラフを乗鞍に設置			
1962	昭37年	4月25日	中央標準時の決定及び現示が規定されている(計量法第3条第3項、文部省・郵政省告示第1号) これは昭和30年7月1日の項と矛盾の指摘あり			
			臨時職員定員化	昭37年	2月5日	ニューギニア島ラエ皆既日食、晴れ、成功(斉藤ら)
		11月1日	堂平観測所開所式		3月28日	岡山竹林寺山近接山林山山火事
		12月	堂平91cm反射写真儀試験観測開始			
1963	昭38年	3月31日	宮地台長退官	昭38年	7月21日	北海道皆既(帯)日食、晴、成功(大沢ら)
		4月1日	広瀬秀雄第7代台長に就任		9月9日	第14回国際電波科学連合(URSI)総会 東京で開催
			24m固定球面鏡完成			
			2級技官は講師、教務系3級技官は助手に編入される			前山(仁郎)講師(8月9日)畑中武夫天体電波部長(11月10日)急逝
		11月	三鷹及び堂平に自動流星儀設置、試験観測開始			90周年記念誌には39年11月とあるが38年11月のほうが良い
1964	昭39年	3月	千葉県丸山の夜光観測所を廃止、機器を堂平大気光観測室へ移転	昭39年	2月	大学附置研究所の研究部門に関する省令制定
			恒星分類部門設置			UTC正式に発足
			17GHz太陽電波偏波計設置			IQSY(太陽活動極小機国際観測年)1964~65
			北米、ハワイおよび南米、豪州向け3組の傾斜V型受信空中線新設	昭40年	5月30日	南太平洋クック島(マヌエ島)皆既日食、うすぐもり(斉藤ら)
1965	昭40年	1月	堂平に新設された極望遠鏡による定常観測1月より開始		7月26日	宇宙航空研究所観測ロケットにより外部コロナ及び内部黄道光観測成功(古畑ら)
		3月	612MHz電波干渉計完成(三鷹)			

			国産シュミットカメラ50cm 慧星写真儀をブラッシャーと代える			
			三鷹の土地5,647m ² 東京都へ管理替え			
			乗鞍、岡山が研究施設として認められる			
		4月1日	人工衛星国内計算私設発足(三鷹)	9月21日	職員表彰内規制定(永年勤続者表彰)	
		4月2日	東京都より31,453m ² 管理替え			
		8月	堂平へ50cm 慧星写真儀設置(移転)			
			堂平に新設の極望遠鏡が新たに定常観測を始める			
		9月21日	職員表彰内規制定(永年勤続者表彰)			
		10月	野辺山にて予備観測開始			
			1.8mX8、17GHz太陽電波干渉計設置			
		10月16日	天文台記念日(10月29日)制定			
		10月21日	乗鞍コロナグラフにより池谷・関慧星の近日点通貨の撮影に成功			
			野辺山設置予定の第干渉計のための予備観測始まる			
			81MHz電波干渉計完成			
1966	昭41年	2月8日	本館(北研及び管理棟)竣工	昭41年	9月27日	宇宙航空研究所(茨城県大洋村大気球実験所)の大型
		3月	人工衛星国内計算私設にOKITAC5090D4掘付完了			バルーンを利用し黄道光の観測を試行
		4月	人工天体運動部門が設置され人工天体運動部発足	11月12日		ペルー日食、晴、成功(斉藤ら)
			分光部が恒星分光部と恒星分類部に分離			Tokyo Time Service Bulletinは39巻まで、40巻よりはTime and Latitude Bulletinと変更した(41年発行)
			堂平が研究施設として認められる			
			Tokyo Time Bulletinは39巻まで、40巻よりはTime and Latitude Bulletinと変更した(41年発行)			
1967	昭42年		野辺山太陽電波観測所工事始まる			
		6月	天体電波部門を太陽電波部門と改称			
		12月	クーデ型太陽望遠鏡の組み立て終わる(建物は3月完成)			
		12月	セシウム原子時計1号機(C1)本台に初めて設置			
1968	昭43年	1月18日	岡山クーデ型太陽望遠鏡完成披露			
				昭43年	1月	本年より太陽活動期国際観測年(IASY)
					1月	東大紛争勃発
		5月6日	野辺山太陽電波観測所(仮称)起工式		5月9日	東京でCOSPAR(宇宙空間研究委員会)総会を開催
					～21日	
		5月	ペーカナーカメラを堂平へ移設		5月	アメリカ海軍天文台よりセシウム原子時計運搬比較開始
		5月20日	Flying ClockによるUSNOと時計比較始まる		6月14日	特異小惑星イカルス地球接近観測のため北海道へ出張(竹内ら)
		10月	セシウム原子時計C2運転開始		11月27日	京都大学飛騨天文台開所
		10月29日	東京天文台創立90周年行事を挙行、90周年誌出版		12月	日立製作所受託研究の人工衛星測距装置実験開始(堂平)
		11月	夜天光・黄道光などの観測のため木曾日義村へ観測所を設け予備観測開始			
		11月9日	広瀬台長辞任し、大沢教授事務取扱、28日に古畑正秋第8代台長に就任			
		12月10日	野辺山観測室134.12m ² 完成			
		12月20日	岡山天体物理観測所本館兼宿舍増築起工式			
		12月	レーザー光線による人工衛星測距装置堂平新観測室にて実験開始(日立製作所寄りの受託研究)			11研究部門(宇宙電波部がふえた)
1969	昭44年	4月	宇宙電波部門が設置され太陽電波部より宇宙電波部が分離	昭44年	1月	安田講堂封鎖解除
		10月9日	160MHz太陽電波干渉計完成を機に野辺山太陽電波観測所開所式挙行			
			6mミリ波宇宙電波観測装置完成		12月	IASY(太陽活動期国際観測年)1969～71年12月
		10月	銀河系研究室を設置			広瀬教授毎日学術奨励金を受け、これをもとに12月
			日ソ共同研究事業「人工衛星による東アジア子午線弧長測定」(堂平に)			日ソ共同観測のため堂平観測所に人工衛星による測地観測を行うためAFUカメラ設置
1970	昭45年	2月	野辺山に公務員宿舍6棟	昭45年	2月11日	国産人工衛星第1号おおすみの打ち上げ成功(宇宙航空研究所)
		4月1日	野辺山太陽電波観測所が施設となった(施設長高倉)		3月7日	メキシコ皆既日食、快晴、成功(斉藤ら)
			野辺山太陽電波観測所運営委員会発足		3月27日	大学改革委員会(教育)設置、それに応じて東京天文台改革委員会が作られ、3月27日第1回会議が行われた
		4月25日	都幾川村西平に堂平連絡所が落成し、披露式が行わる			
		7月	太陽中層大気電波観測装置(160MHz)観測が定常的に行う			
		10月19日	岡山天体物理観測所開設10周年記念式典挙行			
1971	昭46年	1月	セシウム原子時計3号機設置	昭46年	2月16日	科学衛星たんせい打上成功
		3月	シュミット望遠鏡建設委員会設置			ベネット慧星出現
			木曾観測所の敷地決定			
		3月17日	シュミット望遠鏡建設委員会発足			
			この年から国際共同子午線観測			インド・ハイデラバードでさそり座X-1星の光学観測1971(畑中)、72(真鍋ら、三上)
		4月	銀河頭部門が設置され、銀河家部発足		5月	IAU地球回転シンポジウム(Rotation of Earth)開催(盛岡市)
		6月	天文台の国際テレックス開局			
		9月	人工衛星レーザー測距儀を堂平に設置			
			真空紫外領域実験室及び真空紫外領域分光絶対較正測定器完成。建物は前年度		9月1日	宇宙航空研究所の観測ロケット(K-10-6号機)により真空紫外領域の太陽スペクトル(絶対強度および中心周縁強度変化)初観測(西ら)
		10月	乗鞍に25cmクーデ型コロナグラフ完成		9月	宇宙航空研究所の気球による太陽観測の予備実験(47年より本観測)
		10月	野辺山に17GHz干渉計が完成し観測開始		9月28日	科学衛星しんせい打ち上げ成功
					10月～	小笠原でIASY(太陽活動期国際観測年)の大気光観測(田鍋ら)
					～3月	
					11月25日	山陽新幹線鴨方工区トンネル起工式
						1971年度でIASY終了
1972	昭47年	2月4日	岡山天体物理観測所観測協力連絡会議発足	昭47年	1月1日	新しい協定世界時(UTC)開始 (UT1時刻を示す人工時系始まる)
		3月	南本館増築完成			

		4月12日	南本館増築完成披露パーティ举行		5月	秒の定義はAT秒と規定(法律27号、計量法一部改正)
		7月28日	兼鞍に25cmクーデ型コナグラフ完成、披露を行う		8月11日	国産人工衛星「でんぼ」
		8月31日	木曾観測所起工式		7月1日	23時59分59秒の後に初めてのうるう秒を挿入
		10月	兼鞍25cmクーデ型コナグラフ実用観測開始			
		11月7日	堂平観測所開設10周年記念式典举行		9月12日	三陸大気球観測袖気球による太陽観測初めて実施(太陽物理部)
		12月23日	台長選挙大沢教授が選出された		10月8日	ジャコビニ流星の出現に備えたが10月8日出現せず
			本年よりレーザーによる人工衛星測距が定常化			
			この年度 大型乾板用マイクロフォトメーター(1975年2月三鷹より木曾へ移設)			
1973	昭48年	1月16日	古畑台長辞任し、大沢清輝第9代台長就任	昭48年	2月19日	鹿児島宇宙空間観測所で観測ロケットK-10-9号機により真空紫外領域の太陽光の分光絶対測光(西ら)
		1月	ミリ波望遠鏡星間分子ホルムアルデヒドなどの検出に成功		6月30日	アフリカ・モーリタニア皆既日食、砂あらし(守山ら)
			この年度 堂平に彗星分光器官制(測光部)		8月	第15回IAU総会(オーストラリア・シドニー)
			堂平91cm反射望遠鏡新操作盤完成		9月	IAU特別総会(ぼーらんど・ワルソー)
					9月	国際地球電磁気学会(IGA)総会(京都)
					9月15日	三陸隊気球観測所にて気球に苦節望遠鏡を載せ連続光による太陽の直接写真撮影(太陽物理部)
		12月31日	うるう秒の挿入、標準時計を1秒遅らせる		年末	コホーテク彗星
		冬	Kohoutek彗星、近日点に近づいたので4色分解写真観測開始		12月	人工天体パイオニアが木星へ
1974	昭49年	4月11日	文部省令第13号をもって国立学校設置法施行規則中に本台附属研究所として木曾観測所が加えられた	昭49年	1月1日	協定世界時の規則一部改訂
					2月16日	国産人工衛星「たんせい2号」
		10月1日	木曾観測所105cmシュミット望遠鏡据付完了し、開所式举行			
		11月	太陽地球環境国際定常観測特別事業(MONSEE)の一環として野辺山に70~220MHzマルチチャンネル定量動スペクトル計設置			
			この年度 月レーザー測距(装置を堂平に設置)のレーザー光送信望遠鏡製作開始			
			太陽物理部 ミニコン制御マイクロフォトメーター完成			
1975	昭50年	3月	月レーザー観測装置を堂平に設置	昭50年	2月24日	国産人工衛星「たいよう」
		3月	セシウム原子時計4号機設置		5月	東大に大型宇宙電波望遠鏡建設委員会設置
		4月1日	文部省令第11号国立大学付属研究所の研究部門に関する省令中に本台研究部門として太陽分光測光が加えられた		6月13日	三陸大気球観測所の気球により黄道光及び彗星軌道の散乱光観測(田邊、斉藤ら)
			太陽分光測光部門設置			
		4月	木曾観測所105cmシュミット望遠鏡試験観測開始		9月9日	国産人工衛星「きく」
		4月8日	セシウム原子ビーム発振器Cs4運行開始		9月24日	鹿児島宇宙空間観測所で観測ロケットK-10-11号機により真空紫外領域の太陽スペクトルの中心周辺強度変化を測定
		5月9日	東大に大型宇宙電波望遠鏡建設委員会設置			
		5月20日	不詳事件 用度係長島地祥夫 収賄により逮捕			
		9月	大気光観測装置(MONSEEの大気光定常観測)の一部が木曾観測所へ移転			
		9月13日	昭和40年度より運用してきたOKITAC-5090が運用停止			
		11月11日	大型宇宙電波望遠鏡建設委員会設置(5月9日規定)第1回会議			1972年より始まったMONSEE(太陽地球環境国際定常観測)は継続中であるが日本は1975年で打ち切り
		12月26日	OKITAC-5090(は9月13日で運用停止)をFACOM-230-58に改新。FACOM-230-58の導入完了(11月26日設置、調整昭和51年1月1日日本稼働)			
		本年	木曾観測所に大型乾板用プリンコンパレーター、アイリスフォトメーター、アイソフォトメーター導入			
1976	昭51年	1月1日	電波望遠鏡準備室発足	昭51年		IMS(国際磁気圏観測1976~1979年)開始
		3月	20cm太陽望遠鏡完成		2月29日	国産人工衛星「うめ」
		3月	野辺山に200~600MHz動スペクトル計設置		春	west彗星
		8月	木曾夜光観測器械整備完了、大気光の定常観測開始		4月	木曾観測所隣接地に三岳村森林組合利用センター開所
		9月	木曾 頂角4°の対物プリズム望遠鏡に装着		6月22日	木曾天文台協会開催
		10月	木曾・日義村の夜光観測装置を木曾観測所へ移設		9月2日	三陸大気球観測所において太陽望遠鏡を飛揚させ黒点・白点の直接写真撮影(平山ら)
		この年	17GHz偏波計用アンテナ(野辺山)		10月23日	オーストラリア皆既日食、くもり、(守山他2名)
		12月4日	末元善三郎台長選出 太陽望遠鏡購入			
1977	昭52年	1月16日	大沢台長任期満了、末元善三郎第10代台長に就任	昭52年	1月1日	国際原子時(PAI)の刻みの(1+10x10-13(-13:上付き))倍に調整
		6月~7月	三鷹と兼鞍コナ観測所間でセシウム原子時計によるポテンシャルブルーシフト検証実験(飯島ら)			
		10月	野辺山で17GHz偏波計が完成			
1978	昭53年	4月	野辺山宇宙電波観測所発足、大型宇宙電波望遠鏡建設開始	昭53年	5月	IAU太陽系力学シンポジウム開催(東京)
			太陽活動世界資料センター発足			
		5月	天文台部長会内規を廃し教授会内規を制定			

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp